

〔関係機関からの情報提供〕

双葉農業普及所 説明資料

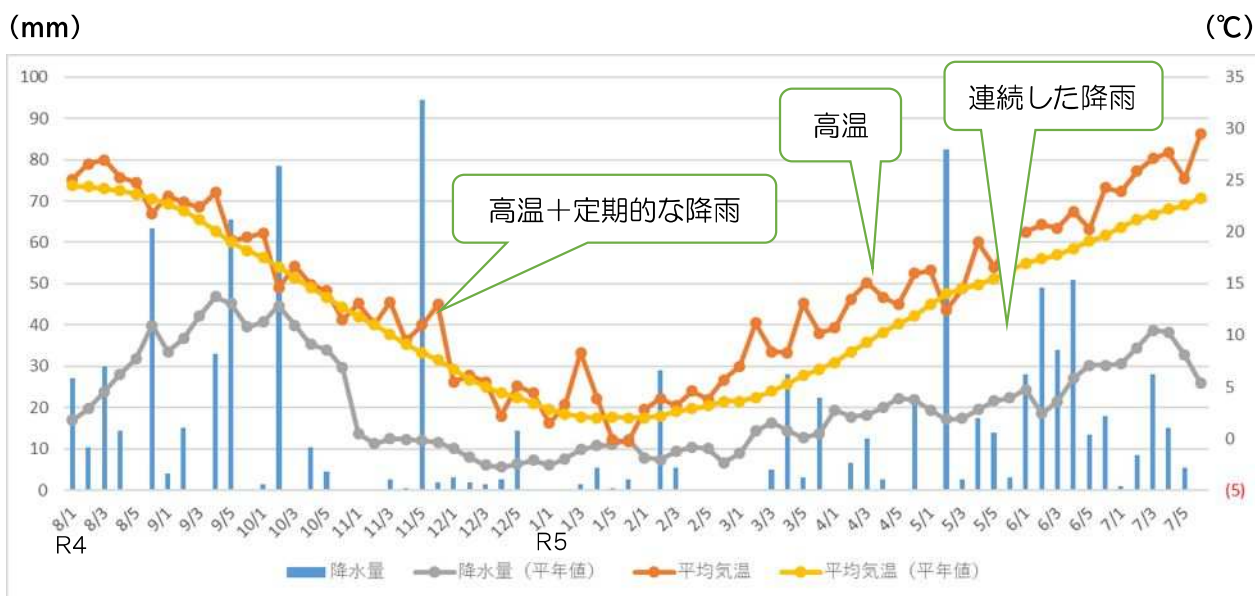
③-(4). タマネギ等園芸品目の作柄概況と
来年度に向けた技術対策

たまねぎの生育経過と今後の対策について

令和6年1月19日

双葉農業普及所

1 気象経過(浪江アメダスデータ)



(1)11月にかけて、平年以上の高温と定期的な降雨が続いた。

→「10℃以上の気温+湿度」がベと病1次感染のタイミング

(2)2月以降、収穫期まで平年以上の温度推移が続いた。

→「15℃以上の気温+湿度」がベと病2次感染のタイミング

→アザミウマ発生の前進化・食害痕からの感染による腐敗果の増加

(3)6月に入ると、平年以上の降水量となり、各半旬で降雨が続いた。

→根切り・葉切り以降～収穫・乾燥までの間が空いてしまい、黒カビ等増加

結果として、ベと病や腐敗果が多発した年となりました。

適期防除は出来ているのか、回数は十分だったのか、課題を一つ一つ見直すことで、たまねぎ増収を図りましょう。

2 作業及び生育経過

(1)育苗・定植

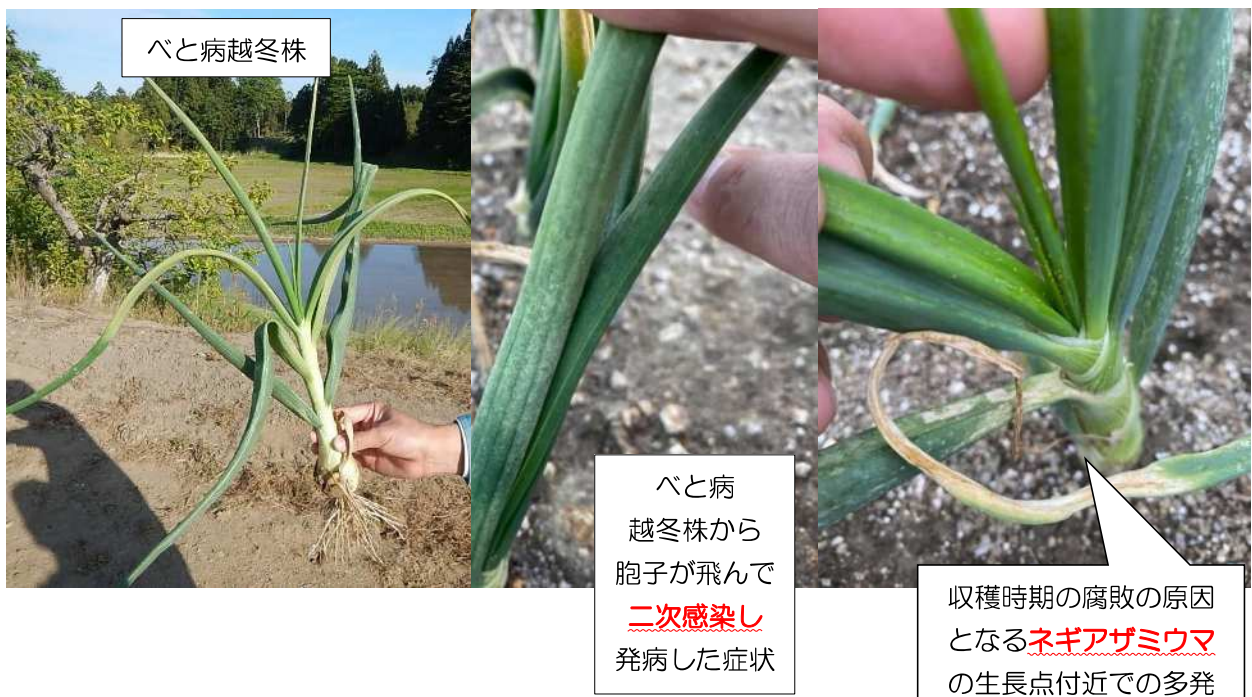
- ・JA 育苗、個人育苗も8月下旬の同時期に播種・灌水がされた。
- ・高温による発芽不良が懸念されたが適切なハウス管理等により発芽揃いは良好だった。
- ・前年度懸念された、育苗中や直播発芽時の苗立枯病の発生は少なかった。
- ・天候にも恵まれ順調に定植作業は進んだ。

(2)生育前期

- ・11月の生育期が、べと病一次感染の好適条件となり、感染が拡大したとみられる。
- ・その後は小雨傾向が続き、草勢低下や外葉欠損など散見された。2月の降雨・降雪までその傾向は続く。

(3)生育後期

- ・11月に感染したと思われるべと病越冬株から、3月以降胞子が周辺へ飛散しべと病の二次感染が多く見られた。
- ・3月後半からのネギアザミウマの発生を抑えきれなかったほ場も多くみられた。



(4)収穫～出荷

- ・収穫作業は6月上旬から順次開始された。しかしながら、①倒伏を待たずに茎葉処理(青切り)したことによるほ場での乾燥不足、②ネギアザミウマ等による食害、③梅雨入り前の長雨や高温による日焼け、といった原因によって収穫後の腐敗が助長された。

3 今後の対策について(詳しくは毎月開催のタマネギ指導会で。)

- ・今年は夏の暑さにより、苗の不揃い・定植の時期のズレが生じています。越冬前に生葉数4枚を目指し、定植後の葉色が悪い場合は速やかにアミノ酸系の葉面散布を実施しましょう。
- ・降雨が少ない場合、根からの肥料の吸収が足りなくなるため、必要に応じてかん水や液肥の使用に切り替えましょう。
 - 肥料の溶けが悪い → 雨で一気に溶ける → 多肥状態 → 腐敗果増加
- ・ほ場を巡回する際に「べと病」の1次感染株・2次感染株を確認し抜き取って、必ずほ場外へ廃棄する。
- ・腐敗果対策の「アザミウマ類」防除は気温の推移と発生状況の確認から。
- ・フザリウム及びびりん茎腐敗症(腐敗病)は高温多湿時に多発する傾向があり、特にフザリウムは20～23℃の多湿時が最適で、他に窒素過多、酸性、連作等が発生を助長すると言われています。毎月の指導会には必ず土を持参し、簡易検査でほ場のpH6以上を維持し、過剰な窒素追肥を抑えるようにする。梅雨に入る前には軟腐病対策として銅剤等の予防剤を十分散布する。

※令和6年度から富岡町たまねぎ集出荷施設が稼働します。

- ・根切り・葉切り後、ほ場での乾燥を待たずに搬入が可能になります。
- ・雨天が続くような場合や、肥大が進みすぎる恐れのある場合はそれを待たずに収穫・出荷が可能になります。